

◀◀◀ ニューヨーク・シティー・マラソンを走って ▶▶▶

総合科学部学生 鶴崎健一

1989年11月5日、第20回を向かえたニューヨーク・シティー・マラソンが開催された。このマラソンは世界三大マラソンの一つに数えられており、ニューヨーク市の五つの区をすべて通るといふものである。日本でも有名なタンザニアのイカンガー、世界最高記録保持者のエチオピアのデンシモ、女子でも世界最高記録保持者のノルウェーのクリスチャンセンなど世界各国からオリンピック級の選手が顔をそろえ、すばらしい大会となった。

現地時間午前10時30分、スタート地点のステタン島のベザノナロース橋のたもとに並ぶ。ある程度の記録をもっている選手はエリートとして優先的に前に並べられた。私もその中に入れてもらった。ここでまず驚いたことは、スタートラインがないことだった。幅が200メートルはあろうかという集団をボランティアの人垣によって押さえているのだった。まず日本では考えられない光景だった。午前10時48分、スタートが切られたようだった。というのは、私は先頭のほうに並んでいたにもかかわらず、スタートの瞬間が分からなかったのである。ボランティアの人垣が崩れたかと思うと、左側に並んでいた選手が飛び出し、「ゴー！ゴー！」と言う声が聞こえた。雪崩のように集団が動いた。スタート地点は三つに分かれてはいたが、何しろ2万5千人以上の集団である。ちょっと油断すると危険だ。スタート直後、私の右後方で転倒者が出たようだった。凄まじいばかりだった。1マイルほど走るともう先頭集団とは10秒以上の差がついていた。それでも私も予定のペースよりかなり速いペースで走っていたのである。「やはり世界のトップの選手は違う。」とそ

の時点で世界との厚い壁の存在を身をもって知るに至った。橋を渡り、ブルックリンに入った。私は、2、3番目の集団を走っていた。しかし、3マイルも行くと集団は崩れ、ゼッケン19番の選手の後方30メートルをしばらく走ることになった。10キロを通過するころには、先頭集団は見えなくなっていた。私も自分の通過予定よりも40秒速く通過しているにもかかわらずである。15キロにかかるころ、自分のペースが落ちてきていることがわかった。気温が低く体が温まらず、しかも前半速いペースで走り過ぎたせいかもしれない。また20キロ辺りでは寒さから一時的に左膝に力が入らなくなるという状態に陥ってしまった。最後まで完走できるのだろうかという不安が頭をよぎった。クインズにある中間点を通過した時点では1時間7分3秒で自分の通過目標タイムより30秒近く良かったのであるがとうていそのままのペースを守れるとは思われなかった。24キロ過ぎにマンハッタン島に渡るクインズボロー橋に差ししかかった。2キロはあろうかという橋で、かなりの急勾配であった。また、金網の歩道のうえに引かれたじゅうたんの上を走るため、足を取られそうで走りにくい。もし先頭に少しでも無理してついていたならばこの橋は渡れなかったろうなと感じた。橋を過ぎてマンハッタン島の1番街を北上する。27キロ付近でコーチとして同行下さった新畑先生の指示を聞く。25、6番手だという。私はいくらか走るリズムを取り戻し、前を走る選手を追いかけた。ゼッケン19番の選手とは離れていったが、数人の選手をかわした。前半飛ばし過ぎたのだろう、歩いている選手もいた。マン

ハッタンから一時ブロンクスに渡る。ブロンクスを走っているとき、左折するところで子供が飛び出し接触するというハプニングがあった。しかし、大勢には影響はなかった。再びマンハッタンに戻り5番街を南下しハーレムを走る。35キロ手前であの19番の選手が足にけいれんを起こしたらしく落ちてきた。私とその選手に追いついたと同時に、今度は40番の選手が後ろから追いついて来た。19番の選手をかわし40番の選手と並走する。セントラルパークにかかる手前で20番の選手にも追いつき、三人で争うことになった。沿道の人の言葉から、今17位争いをしていることがわかった。セントラルパークの横を南に走る。一人の選手が落ちてきた。日本のリクルートの金選手であった。完全に疲れ切っているような走りだった。私達が追いついたときも全くついてこれないようだった。セントラルパークの中に入っても三人の争いは続いた。公園内は小さな起伏が多く、一気に疲労が噴き出してくるようだった。39キロぐらいであろうか、私がちょっとふらついてしまい、40番の選手に接触してしまった。何か二言三言、どなられたのだが、何を言われたのだからさっぱりわからなかった。とにかくはやくゴールにつくことしか考えておらず、接触で転倒しなくて良かったと思うだけで精一杯だったのだから。40キロ手前で40番の選手がペースをあげ、私はついに遅れ始めた。二人の選手と私との差がみるみる広がっていった。もう私には追いつける元気は残っていなかった。「とにかくゴールまで走り切らなければ。」それしか頭になかった。セントラルパークの南端の通りを東に走る。800メートル近い直線だが5キロにも相当するようなきつさだった。「すごい人の数だな。」などという、全くたわいもないことを考えていた。もう順位も記録もどうでもよかった。再度セントラルパーク内に入った。最後の坂を越えると、あとゴールまで300メートル。前方が大きく開けた。100メートルほど前で三人の選手が

争っていた。「もう少し自分に力があつたならばあの争いの中に入っていたのだろうか。あの中でのトップが15位なんだな。」と考えながらゴールに向かった。結局、40番、20番、そして前から落ちてきた13番の選手の順でゴールした。数秒後、私もやっとゴールにたどり着いたのだった。「コングラッチュレーション！」荷物置き場に向かう途中、多くのボランティアの人々に声をかけられた。「サンキュー！」となんのためらいもなく素直に笑顔で答えられた自分が不思議だった。総合18位、記録も目標としていた2時間15分には届かなかったものの自己最高の2時間16分35秒で、しかも日本人トップのおまけつきである。無理もないかもしれない。しかし、それ以上にとにかく無事に完走できたことのほうが嬉しかった。初めての海外のレースで、エントリーもれなどのハプニングがあつたりした中でよく頑張つたな、と、自分をたたえたい気持ちが強かった。

今回のレースは私にとって十分納得でき、また勉強となるものでした。優勝したイカンガーと8分以上、距離にして2キロ以上の差があり、世界の一流選手との力の違いを思い知らされました。また、今回、ニューヨークで走るに至った過程を考えると、競技としてマラソンを走るのとは一人では不可能に近く、ベストを出し切るには周囲の人々の協力が不可欠であることを強く学びました。このマラソンのためにご指導ご支援下さった方々、特に、研究面で多大なご迷惑をおかけしています倉石先生、桜井先生、競技に対して直接ご指導下さいました宮原先生、新畑先生に対しましては感謝の念に耐えません。今後は、研究活動とマラソンの両立を目指しながら、一つ上のレベルへと向かって努力していこうと思っています。私自身、マラソンランナーとして大成するかは疑問ですが、もし目に留まるような場面がございましたら、今後ともご支援下さい。